

組織宣伝、事業活動と運営

チラシ、ポスター、HP、その他

祭典チラシは仮チラシ8000枚と2回の本チラシ各3万枚、祭典後半になって、手書きでイラスト入りの4枚折チラシ「ほかほかガイド」を1万枚、計7万8千枚を製作した。チラシやポスターの「ほかほかちゃん」のイラストは大変好評だった。手書き「ほかほかガイド」は親しみがあって、祭典の内容を知らせるのに大きな効果があった。

ポスターは500枚製作した。マスコミ関係では記者会見も行なった。その結果、福井新聞、日刊福井・中日新聞が祭典のことを報道した。また、つながりステージ、うたのわ500の練習の様子が報道された。10月に「FM福井」も祭典のことを報道した。

祭典ニュースは実行委員会を開くごとに「雪あかり」を8号発行した。また、事務局ニュース「かたいけのー」を24号発行した。これらのニュースはそのときの課題、到達などを各ステージの団員に知らせ、ステージ作りやチケット普及に大きな役割を果たした。

祭典HPは、今までの祭典ではなかった新しい情報伝達手段として大きな役割を果たした。メーリングは即座にニュースを伝え、互いに情報を共有することができた。特に後半はステージづくりの情報交換に大きな役割を果たした。

うたごえ新聞

うたごえ新聞読者拡大は祭典成功の大きな柱と位置づけ、1000人の目標を持って、期間中に24人で338人に拡大した。自ら拡大推進チームに申し出てくれた粟田栄さんが100人以上の拡大を進め、拡大推進の機関車となった。また、買い取りも含めた4500部の宣伝紙で、広く大きく読者拡大を進めた。

永平寺の宮崎奕保貫首のメッセージ、同寺の森嶺雄監院のインタビュー、うた新フォーラム、国宝明通寺での平和の歌奉納コンサート、同寺の中嶋哲演住職のインタビューなどの記事掲載で祭典を全国発信できた。また記事の内容が地元での拡大に大きくつながった。

運営委員会、事務局体制

事務局体制は1昨年9月の実行委員会結成と同時に事務局長を専従として活動を開始した。運営委員会は月一回をベースに、その時の状況に応じて、臨時、及び拡大運営委員会として16回開いた。6月に西江運営委員長が亡くなった後、直ちに臨時運営委員会を開き、伊藤敬一さんを新運営委員長に、松永朝恵さんを副運営委員長として体制を立て直し、待ったなしの課題に取り組んだ。最少の体制ではあったが、全国協議会の支援もいただき、それぞれが責任を果たし、祭典成功のために力を尽くした。実行委員会は9回開いた。

大音楽会当日の要員体制では、地元要員確保が少ない中、奈良のうたごえ協議会が総力をあげて30人を送ってくれた。

事業・財政活動

祭典財政は、借入・賛同金・チケット・広告・事業収入の5本柱で構成し、祭典取り組みの中でその都度、重点柱を明確にして取り組んだ。

賛同募金（一般賛同金、一口1千円、特別賛同金一口1万円）は3月から本格的に取組

み、地元目標2000口を6月、全国目標2000口を7月に超過達成した。祭典成功を左右する大音楽会のチケット普及は、地元目標3000枚を、祭典当日の段階で超過達成した。プログラム広告募集は集中した取組みで目標400(地元200口)を大きく超えた。

事業は出版、物産、祭典グッズ、ビデオ、ツアーなどを取組み、出版では祭典歌集「あったかい歌」「斉藤清巳作品集」を発行。ツアー事業を除く全ての事業で好成績を上げた。特に祭典グッズは好評を博し、祭典の事前宣伝に寄与した。物産展も地元特産の出店が20店舗を超え好評だった。

祭典全体の財政は、大イベントホール・サンドームの舞台設定(仮設舞台)等で予算が大きく膨らんだが、祭典組織の拡大、賛同金、事業活動の奮闘により黒字で納めることができた。